

## 定住化

—生活様式論として—

旧大陸の乾燥および半乾燥地域における人間集団の生活を、遊牧と農耕の二つに類型化して記述する、あるいは、その類型化にもとづいて、地域間の関係を説明するのは、環境論として、まず自らの理論的体系を確立した十九世紀の近代地理学において一般的なことであった。このような十九世紀地理学の生態学的性格の、もっとも完成された表現であるところのヴァイダール・ドゥ・ラ・ブラーシュの人文地理学においては、農業とノマディズムとが、相対立する生活様式として概念化され、ステツプ地帯や、シルヴとサヴァンナとの接触地帯に位置する都市は、異種の生活様式の接触の場として説明されたのであった。<sup>(1)</sup> 乾燥・半乾燥地帯において、農業は、中耕を

## 竹内啓一

ともなうドライ・ファームینگか、水利事業をとともなう灌漑農業の形態をとるから、当然それは定着農業であり、他方、豊かな森林資源を前提にはじめて可能な移動式農業(すなわち農業的ノマディズム)はここではありえないので、ノマディズムは、遊牧(すなわち牧畜的ノマディズム)のことになる。この二つの生活様式の共生関係 symbiose や寄生関係 parasite に注目することが、旧大陸の広大な乾燥、半乾燥地域の歴史の解釈に、ひとつの新鮮な観点を提供する契機になったのはたしかであるが、同時に、ここでいわれた「共生」とか「寄生」というものが、もともと「生活様式」としての定着農業とか遊牧というものが、環境論における概念として、技術

の側面から定義されたものであることから考えれば当然のことであるが、生態学の概念のアナロジカルな適用によるものであったことに注目しておく必要がある。『共生』というひとつの均衡状態を成立せしめる二つの要素、すなわち定着農業と遊牧は、判然と区別され、それぞれ安定した存在であることが前提されていたのであり、それだからこそ、程度の差こそあれ持続的な、接触地帯というものが考えられたのである。

(1) P. Vidal de La Blache: *Principes de géographie humaine*. Paris. 1922 34—37 (飯塚浩二訳 人文地理学 原理 上巻 九〇頁以下)。

ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュの「生活様式」という概念を、学説史上このように位置づけることについての考察は、以前におこなったことがあるので、ここではくわしくはふれない。(拙稿「マクシミリアン・ソールとフランス地理学」一橋論叢 第五十九巻 一九六八年 四六一—四七九頁)。

しかし、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュが考察の対象にした十九世紀後半の旧大陸乾燥・半乾燥地帯における生活は、実際には、彼が類型化したように単純なものではなかった。勿論このことは、この単純化が、ラッ

ツェル流の機械論的自然決定論に対する批判、乃至は修正の理論的基礎となった「生活様式」概念の有効性を、いささかでも減じていたことを意味するものではなかったが、これらの地域の社会的事実の記載、あるいは地誌叙述の方法論としては、まさに、この概念の、生産関係的視点を欠く生態学的性格の故に、ヴィダール流の「生活様式」概念が、限界をもっていたことを物語るものであろう。すでに今世紀初頭に、ベルナルとラクローワ、アルジェリアにおける遊牧生活に関する古典的労作<sup>(2)</sup>において、遊牧民の遊牧範囲と社会組織が、フランス人コロンのよるブドウ栽培の拡大にともなって急速に変化し、遊牧生活を放棄することを余儀されるような事態さえ生じてきていること、そして、これらは、中世初頭ベニ・ヒラル・ペドウィンのマグレブへの進入の際に生じたのと、丁度逆のプロセスであると考えられることなどを指摘していたのである。おなじような遊牧生活の衰退が、北西アナトリアにおいて、オットマン帝国治下における十九世紀初頭以降の治安の安定に伴なう農耕地の拡大の結果として惹起されたことが、ドゥ・プラノールの最近の研究<sup>(3)</sup>によって明らかにされており、また、中央アジア、

カザフスタンやキルギスにおいて、十九世紀中葉以降、ロシア人の農業移民によって放牧地をうばわれた遊牧民が、山腹をますます高い所にまで、あるいは砂漠の奥深い所にまで彼らの生活範囲を拡大して、牧畜生産力を低下させたのも、本質的には、おなじ遊牧生活の変化のプロセスであったと考えることができるのである。

このような、遊牧生活の変化の過程とも関連するのであるが、遊牧から定着農業にいたるまで、実際には、極めて多様な生活の形態がありうることも、また、ベルナールとラクロワによって指摘されている。彼らは、移動距離の短かいもの(二十キロから五十キロ)、いわゆるトランスヒュマンズに属するもの、完全なサハラ遊牧民(sahariens proprement dits)といった分類をおこなっており、その分類の基準は、必ずしも一貫していないが、いずれにせよ、この場合、家畜をともなつてする移動の距離や、放牧地とキャンプ地との関係といった側面からみるならば、遊牧と、定住地をもつトランスヒュマンズとの間は、連続的なものであることを認めているのである。遊牧と定着農業との間の移行関係は、ドック・プラノーがのべているように、人類の歴史の中で常にみられた

ことであり、文化史的な観点からすれば、ヨーロッパの農村の生成そのものが、遊牧的な生活をいとなんでいた諸種族が、くりかえし定住化してきた過程にほかならないのであるが、われわれが現在みるような形で、すなわち、西ヨーロッパ勢力との接触、あるいは、近代化の直接・間接の影響をうけて、伝統的な遊牧生活が破壊されるという形で、遊牧社会の変貌が大規模に進行するようになったのは、前世紀後半以来のことであろう。遊牧の極めて特殊な形態であるラクダ飼育によるキャラバン活動の強化などということが、この「近代化」の時期においては、一般的にありえないとすれば、遊牧生活の破壊ということとは、それが直接農耕と結びつくことはなくとも、何らかの形で、定住化ということをともなう筈である。ここにおいて、定住化ということに焦点をすえて、遊牧社会の変貌を研究するための糸口を提示しようというのも、このような理由からなのである。

(2) A. Bernard et N. Lacroix: L'évolution du nomadisme en Algérie. Algiers. 1906 の書物を筆者は未見である。この著者 J. Berque による Nomads and nomadism in the arid zone. International Social Science

Journal Vol. XI, 1959. ④中④ Introduction 481—498.  
 J. I. Clark: Summer nomadism in Tunisia. Economic  
 Geography, Vol. 31. 1955. 157—166 R. Capot-Rey: Le  
 nomadisme dans l'Afrique du nordouest. Annales  
 de Géographie, Vol. XLVII 1939 184—190 によつた。

(3) X. de Planhol: De la plaine pamphylienne aux  
 lacs pisidiens. Nomadisme et vie paysanne. Biblio-  
 thèque archéologique et historique de l'Institut  
 Français d'Archéologie d'Istanbul, III. 1958 109—131.

Do.: Geography, politics and nomadism in  
 Anatolia. International Social Science Journal, Vol.  
 XI. 1959 525—531.

(4) H. Schlenger: Strukturwandlungen Kasachstans  
 in russischen, insbesondere sowjetischen Zeit. Die Erde  
 Bd. V. 1953 250—264.

O. A. Сухарева: Этнографическое изучение колхоз-  
 ного крестьянства Средней Азии. Советская Этногра-  
 фия 1954 No. 3.

V. A. Kovda: Développement de l'exploitation des  
 terres arides de la plaine russe du Caucase et de  
 l'Asie Centrale. Histoire de l'utilisation des terres des  
 regions arides. UNESCO 1961 199—244.

(5) X. de Planhol: De la plaine pamphylienne, Op.  
 cit. 123—131 ①の著書①のどのような観点からする分析を、

筆者はかつてこころみたことがある。(地理学評論 第三  
 五卷 一九六二年 五九〇—五九二頁)。

遊牧と定着農業という範疇が、本来、旧大陸における  
 人間集団の生活様式の、その生産技術の側面からの分類  
 という性格をもつものであるとすれば、かつては、遊牧  
 社会の相対的安定の故に、このような生活様式の類型区  
 分が有効であった地域においても、現在では、定住化と  
 いう動態的契機を考慮にいれなければならない、そのさい、  
 それでは、そのような生活様式論の立場から、どのよう  
 な類型化が可能であろうか、これがここでの第一の問題  
 である。次に、そのようにして、現実にみられる多様な  
 生活の様式の中で、遊牧および定着農業という概念をど  
 のように定義するかということが問題になる。人類の文  
 化史においても、あるいは、乾燥地域というものの性格  
 を考えるさいにも、この二つの概念は、対極をなすもの  
 であるが、その対照は、単に技術について、すなわち、  
 生産力の次元においてのみいえるものなのか、それとも、  
 地縁共同体の社会的性格にまで関することなのかとい  
 うことが、そこで問題になるのである。この問題はいわゆ  
 る「複合体としての生活様式<sup>(6)</sup>」という概念が地域性の把

握にどこまで有効であるかという、社会地理学の基本的な方法論に関するものでもあるのである。<sup>(7)</sup>

(6) 直接このような言葉を用いたのは、ソールであるが、(前掲拙稿参照) このような考え方は、モデルという概念を人文地理学に導入しようとする最近の支配的な傾向の根底にあるものである。

(7) 本稿は、そのような意味での問題点の整理を意図したものであって、旧大陸の乾燥および半乾燥地帯において、ひろくみられる定住化の過程についての、包括的な記載や総合的な分析ではない。また、筆者は、マグレブ、スーダン、アナトリアの一部において、遊牧・半遊牧民の生活を瞥見しただけであって、そこで科学的な調査に従事したことはなく、ここにおける事実の記載は、すべて文献資料によったものである。したがって、これは、より本格的な実証的研究のための基礎、あるいは、予察的研究という性格をもったものである。

遊牧、すなわち牧畜的ノマディズムはノマディズム一般とははっきり区別されるべきものであるし、他方、文化史的にみて、遊牧の起源は、動物馴化の起源よりはるかに新しい。羊、山羊、ラクダ、牛を家畜とするところの旧大陸乾燥地帯の遊牧の起源については、メソポタミアに関しては、紀元前二千年という説もあるが、<sup>(8)</sup>内陸ア

ジアのステップにその起源を求める研究者は、紀元前十〜九世紀にその時期を求めるのが一般的である。<sup>(9)</sup>ソ連領中央アジアについては、紀元前八〜七世紀、アンドロノヴォ文化の末期に、最初の社会的分業として、遊牧経済の分離がなされたことがいわれている。<sup>(10)</sup>このようにして、その起源の時期については、諸説が必ずしも一致しないし、また、場所によって、その時期が相違するのは当然でもあろう。農耕から牧畜が遊離したのか、それとも、当初は、野生の動物の習性に人間がしたがうことによつて牧畜的ノマディズムが発生したのかという文化史に関する議論には、ここでは立ち入らないが、いずれの場合にも、土地利用の一形態としての牧畜は、遊牧をも含めて、旧大陸においては、極北のトナカイ飼育民を別にすれば、その原初的段階から、農耕と密接な関係をもっていたことが注目されるのである。今日、牧畜形態の分類を、農耕との関連のしかたによってするのは、この意味において、旧大陸における牧畜の本来的な性格に合致した考え方であるということができよう。

遊牧と定着農業との間には、短期間の作物栽培のためのキャンプ地をもつもの、あるいは集団の一部の成員が、

年間を通じて一定地点にとどまる、すなわち定住地をもつもの、など、多様な形態が存在し、これらは、通常半遊牧 *seminomadism*, *deminomadisme*, *Halbnomadentum* の名で呼ばれている。この場合放牧地は夏のもの<sup>(1)</sup>と冬のもの<sup>(2)</sup>の二つからなり、共同体成員の一部が冬の牧場または夏の牧場のある場所に、農耕に従事しながら定住する半遊牧の形式がトランスヒュマンズ(移牧)である。アペニン山脈、アトラス山脈をはじめ、各地の半乾燥山地にみられるように、冬の雨期に、平原の草地を求めて、家畜と共同体成員の一部がトランスヒュマンズするのが正常な形式であって、スイスにおけるアルプス経済 *Almwirtschaft* のように、夏にトランスヒュマンズするのは逆移牧とでもいふべき形式である。

牧畜的ノマディズムと定着農業とのあいだにある諸様式を、移動技術および農耕との関わりかたの面から形式的に、したがって超歴史的に分類するとすれば、以上のように整理するのが最も適当であると思われるのであるが、通常は、移動距離というような量的要因、あるいは山地とか平地とかいうような移動環境が分類の基準として加えられているし、またときには、これらの諸様式の

間の推移・発展の順序といったような、歴史的條件、社会的環境條件によって相違する要素が分類の中にはいつてきて、複雑な、あるいは混乱したさまざまな分類がなされている。

さきにふれたベルナルとラクロワの分類は、そのよ<sup>(1)</sup>うな観点からすると、移動距離とキャンプ地との関連からなされた形態分類であるが、移動距離の短いトランスヒュマンズのように、彼の方法では、分類不能のものでてくるといふ欠陥がある。北アフリカの遊牧民に関しては、おなじような形態分類として、一九三七年に発表されたメルナーのものがある。彼は(1)完全遊牧民(*Vollnomaden*) (2)半遊牧民 (*Halbnomaden*) (3)砂漠遊牧民 (*Wüstennomaden*) (4)山地遊牧民 (*Bergnomaden*) の四つを区分し、このうち(1)と(2)は移動距離の差によって分けられるものであり、(3)は(1)や(2)とちがって移動に季節性のないもの、(4)は半遊牧にはちがいないが垂直移動を主とするものと定義した。これは形態分類としては一貫したものであるが、この分類においては、農耕との関連は考慮されておらず、たとえば彼が(1)における例としてあげているアトラス山麓の遊牧民で夏に高地に移動する

ラルバー、サイト・オトバ、アラブ・チエラガ、ガラバなどの諸族のうち、茶のキャラバン交易に従事していたサイト・オトバ<sup>(13)</sup>をのぞいて、他は、いずれも、すくなくとも前世紀末、彼らがフランス植民者との接触を開始した当初から、程度の差こそあれ農耕にも従事する移牧民であったのである。おなじように、彼によって(2)に属するとされた諸族にも、モロッコのメセタ中央部の諸族のように、農耕を、すくなくとも第二次大戦前の段階までは知らなかったものから、アルジェリアのチエララのステップ地帯におけるように、その起源は遊牧民によるオアシス農民の奴隷制的支配によるものであっても、遊牧民が、伝統的に穀物やナツメヤシの栽培に従事している種族<sup>(15)</sup>まで、農耕への関与という点で、多様な諸形式がある。

- (8) J.-R. Kupperts: Les nomades en Mésopotamie au temps des roi de Mari. Paris. 1957.  
 (9) L. Krader: The ecology of nomadic pastoralism. International Social Science Journal, Vol XI. 1959 499—510.  
 (10) A. H. Бернштам: Спорные вопросы истории кочевых народов Средней Азии в древности. Краткие

Сообщения Института Этнографии АН СССР XXVI 1957 18—21.

C. C. Черников: Роль андроновской культуры в истории Средней Азии и Казахстана. Краткие Сообщения Института Этнографии АН СССР XXVI 1957 28—33.

- (11) このことは、カポ・レイによってすでに指摘されている。(R. Capot-Rey: Op. cit.)  
 (12) P. G. Merner: Das Nomadentum in nordwestlichen Afrika. Herausgegeben vom Geographischen Institut der Universität Berlin, Heft 12, Stuttgart 1937.  
 (13) これについては、M. Ruvillois-Brigol: La sédentarisation autour d'Ouargla. Nomades et nomadisme au Sahara. Recherche sur la zone aride XIX. UNESCO 1963 135—141. に報告がある。また、このロカイロロニトリコル女史の報告によるかぎり、サイト・オトバは、メソターの分類による砂漠遊牧民に属すると考えられる。  
 (14) この事実については、J. I. Clark: Op. cit. にある。  
 (15) P. Birot et J. Dresch: La Méditerranée. et le Moyen-Orient I La Méditerranée Occidentale. Paris. 1953 464—466.  
 V. Monteil: The evolution and settling of the nomads of the Sahara. International Social Science Journal. Vol XI. 1959 572—585.

直接的には、トランスヒュマンズの位置づけという問題になるのであるが、より根本的には、遊牧と農耕との関係、いかえれば定住化にともなう生活形態の変化を考慮にいった分類は、第二次大戦後ニーマイアによって、やはり北アフリカについてなされた<sup>(16)</sup>。彼は分類の基準を、生活形態 (Lebensform) と生活空間 (Lebensraum) の二つに分け、前者によれば、完全遊牧と半遊牧に分けられ、後者によれば、砂漠遊牧、ステップ遊牧、山地遊牧の三つが区別されるとした。ここで、半遊牧というのは、一ヶ所に七ヶ月以上滞在してナツメヤシなどの栽培に直接従事するか、あるいは奴隷制に由来するところのハマサ制分益小作人<sup>(17)</sup>から年貢をとったりする場合のことであって、ステップや山地におけるように、そのような一ヶ所への滞在が、放牧地への季節的移動と結びついている場合には、これがトランスヒュマンズと呼ばれるというのが、彼の説明である。土地や家畜に対する権利の性格、あるいは所有形態は、このような農耕・牧畜の技術的形態よりも、むしろ各地の歴史的条件によって極めて多様なものになっており、また、おなじ移動といっても、伝統的な形式のものから家畜をトラックや列車ではこぶ機

械化された遊牧や移牧まであるのであるが、ここにおけるニーマイアの分類方法は、形態分類という立場をたぬいて、そのような生産関係、流通関係を直接には考慮に入れていない。しかし、逆にいえば、そのような立場から、多様な中間形態あるいは定住化のプロセスを分類していくことによって、形態分類の基礎にある生態学的<sup>エコロジカル</sup>な諸条件のもつ意味を明らかにしていくことができるのである。

(16) G. Niemeier: Vollnomaden und Halbnomaden im Steppenhochland und in der nördlichen Sahara. Erdkunde, Band IX. 1955 249—263.

(17) ハムサ (Khamessat) 制においては分益小作農ハメス (Khamess) は、その名の通り收穫の五分の一だけの権利を有するのを原則とする。その根拠は、土地、種子、役畜、農具、労働力のうち労働力しか提供しないからとされているが、実際には、直接耕作者が種子や農具の一部を提供することもあり、また、ハメスの小作契約は秋の收穫についてかわされるので、春の收穫があれば、それは小作人のものになるので、小作人の分け前はもっと多いのが普通である。(P. Bilot et J. Dresch: Op. cit. p. 466f)

砂漠地帯における完全遊牧は、キャラヴァン活動に従事する集団をのぞけば、その例は非常にすくない。砂漠

地帯においては、北アフリカにおけるハムサ制による支配を含めて、オアシス農耕民と牧畜民との共生関係がむしろ一般的であり、これは半遊牧の形態をとる。また砂漠地帯における完全遊牧は、その移動距離が長く、治安上の理由による定着化政策、ヨーロッパ人植民者あるいは族長や都市居住者による困いこみを意味するところの土地私有制の確立、さらにはトラック輸送のキャラヴァンルートへの進出などの影響をうける機会が非常に多い。いわゆる遊牧社会の破滅的変貌ということがいわれることの最も多いのがこのケースであって、家畜の輸送が機械化され<sup>(18)</sup>、ラクダ遊牧民保護のためにトラック輸送が禁止され<sup>(19)</sup>ないかぎり砂漠の遊牧民は、伝統的生活様式、社会組織をまったく破壊され、流民として、都市のいわゆるピドンヴィルを形成することになる。<sup>(20)</sup>砂漠地帯において、遊牧社会の変化が破滅の様相を呈するということは、しかし、砂漠のエコロジカルな条件だけによっているのではなく、国境線が砂漠地帯に設けられる場合が多い、ということ、また、中東や北アフリカの油田は、ほとんどが砂漠地帯に位置している、といったような条件も考慮されなければならない。

完全遊牧が、伝統的な様式として多くみられたのは、むしろステップにおいてであって、山地においては、垂直移動というその性格上、牧畜生活は農耕をとまう半遊牧の形態をとりやすい。同時に、このステップ地帯は、十九世紀後半における植民者による綿花（中央アジア）やブドウ（北アフリカ）の栽培、さらに最近二、三十年間は、トラックターの導入によるアメリカ式ドライブアイミングの普及<sup>(21)</sup>が著しい地帯でもあり、放牧地の喪失、労働力および農牧生産物の商品化の機会の増大といったような、それにとまうインパクトも非常に大きい。この場合、羊やラクダから牛に家畜の比重を移していった<sup>(22)</sup>りあるいは、農耕を開始したりして、土地利用を集約化し半遊牧民化、定住化への道をあゆむ条件が存在するわけである。この百年間にみられたいわゆる「遊牧民の定住化」は、遊牧・半遊牧民のオアシスへの流入という形か、このステップ地帯での農耕の開始という形でなされたのが殆んどであって、報告されている事例も非常に多い。歴史地理的にみても、たとえば、アナトリア高原に、冬の牧場を意味する *Yedigöller* に起源する *Yedigöller* という語を伴った農村名が非常に多いのは、このステップ地帯

の農村の多くが遊牧民の定住化によって形成されたことを物語るものであろう。半遊牧民化は、必ずしも、定住化を意味するものではないが、ステップ地帯では、遊牧生活の放棄がそのまま農耕をとまなう定住化につながる事例が殆んどで、この点、半遊牧の状態で、農耕に直接従事することなく、寄生、または共生の形でオアシス農耕と結びついている砂漠地帯におけるベドウィンの定住化とちがっている。ステップで定住化した場合従事する農業は、非灌漑農業の場合もカレーズや動力井戸による灌漑農業の場合もあって一定しない。ドゥ・プラノールの報告するトルコにおける定住化の例は<sup>(25)</sup>いずれも非灌漑農業であり、そして、そこから形成されてくるのは、分割地農民である。イラン高原において大野が報告している事例は、ステップ地帯といっても、乾燥の度合のはなはだしい所であるが、四十年前に定住化して農業を開始したときから、カレーズ(カナット)によっていた。この場合、カレーズと村壁をつくったマーレキのもとに、かつての遊牧民が小作人、この場合にはライヤットになって村落をかたちづくり、中央政府の政策にもよるものであるが、移動放牧をまったく放棄している。おなじよ

うな形での定住化は、ウエッレルスが報告するシリアのいくつかの新しい村落においてもみられたこと<sup>(27)</sup>であって、今世紀になってから、中央政府の定住化政策のもとに灌漑農業をとまなう定住化がなされる場合には、その具体的内容は多様であるが、寄生地主制が成立し、移動放牧の完全に放棄されるのが一般的であるようである。この寄生地主層が、遊牧民の部族内階層組織の中から出てきたものなのか、それとは別の社会層が出てくるのか、今のところ筆者は、一般的な形で地域的傾向などを云々するだけのデータをもちあわせていない。サハラのおアシスにおけるハムサ制度は、遊牧民的階層制に由来するものであり、<sup>(28)</sup>他方、アトラスぞいのステップ地帯においては、アナトリアの場合に事情がかなり似ていて、土地の割替制・共同労働者などの共同体的慣習は残っても、法制上、土地は、所有が細分されたメルク *melk* すなわち私有地になっている。<sup>(29)</sup>北アフリカに関しては、砂漠地帯とステップ地帯においては、定住化の過程は、その社会的側面に関する限り、この点で根本的に相異しているということがいえるのである。

(18) スーダンやニジェールなど、サハラ南部において、こ

- のやうな事例が若干報告されてゐる。(C. Battillon: Modernisation du nomadisme pastoral. Nomades et nomadisme au Sahara. Recherches sur la zone aride XIX. UNESCO 1963 143—151) の連領カヌビ海沿岸においても、集団化にとまなつてかつての遊牧民の牧畜システムが組織され、移牧ブリガードという形で家畜の大量トラック輸送がなされてゐることが報告されてゐるが、この場合とは、定住化をとまなつてゐる。(A. N. Rakitnikov: Utilisation agricole et pastorale des terres dans le semidésert, Sur l'exemple des semi-déserts de la région précaucasienne en URSS. Вопросы Географии. Сборник статей для XVIII Международного Географического Конгресса. АН СССР 1956 303—311)
- (19) たとえば、一九五四年に、南アラビア地方のクアイティのヌルタンは、輸送トラックの使用を禁止してゐる。(V. Monteil: Op. cit. p. 578)
- (20) bidonville の人口増加は、しばしば気候的カタストロフの結果として説明される。たしかに、マテレブ都市においては、第二次大戦後の都市人口の急増は、大旱魃の年に顕著である (P. Birot et J. Dresch: Op. cit. 509—510) が、気候条件によつて草の成長量が年ごとに大きく変動する場合、社会的・経済的要因は、旱魃の年に爆発的にあらわれるのである。
- (21) 宮治一雄：アルジェリアにおける伝統農業の「近代化」——予備的考察——「アジヤ経済」第七卷十二号 一九六六年 六八一—八二頁。
- (22) サカンカリスにおいては、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、帝制ロシア時代の統計を用ひても、この現象を確認することは可能である。(B. Д. Монахов: Крестьянское хозяйство в Закавказье к концу XIX в. Москва 1958) オラン地域においても、前世紀末以来のおなじやうな変化が報告されてゐる。(R. Capot-Rey: Le nomadisme pastoral dans le Sahara français. Travaux de l'Institut de recherches sahariennes, Tom I. Algiers. 63—86)
- (23) マ・プランノンの考察による。(X. de Planhol: Geography, politics and nomadism. Op. cit.)
- (24) したがつて、ヴェイルのやうに、牧畜を「農耕をとまなわぬ牧畜」と農耕をとまなう牧畜というやうに二大区分すると、ここでもニューマイアがらつてゐる半遊牧や移牧は、農耕をとまなわぬ場合にも、とまなう場合にもありうることになる。ヴェイルは、半遊牧を前者に帰属させて、これを移行形態 forme de transition とのへ、後者に属するものとして、マルプス型山地牧畜 élevages montagnards de type alpin をあげてゐるが、そのやうに、マルプス型ハイマンスとマルプス型牧畜の、本質的に同じ性格が見失なわれることにならぬ。(P. Veyret: Géographie de l'élevage Paris. 1951)
- (25) X. de Planhol: De la plaine pamphylienne. Op.

(37) 定 住 化

旧大陸の乾燥、半乾燥地帯の山地においては、さきにくべたように、半遊牧の形式が一般的であり、その大部分はトランスヒュマンズのかたちをとる。ただニーマイアの分類によるところの牧畜の山地型とステップ型の境界は決して明確ではなく、移動が山地とステップにまたがるものを山地型とするならば、山地型半遊牧の大部分は、乾季の夏に放牧地を山地に求めて定住地を低地の冬の牧場にもつ正常型のトランスヒュマンズということになる。逆トランスヒュマンズは冬の低温のために、冬

cit.

(26) 大野盛雄：イラン農村の社会経済構造の研究、第三部 ケイルアーブード（シーラーズ）の例 東京大学東洋文化研究所紀要 第四十冊 一九六六年 一八一—二九〇頁。

(27) J. Weulersse: Paysans de Syrie et du Proche-Orient. Paris. 1946.

(28) B. Sarel-Sternberg: Semi-nomads du Nezaoua. Nomades et nomadisme au Sahara. Recherches sur la zone aride, XIX. UNESCO 1963 123—133.

M. Rovillois-Brigol: Op. cit.

R. Capot-Rey: Borkou et Ouanianga. Etude de géographie régionale. Algiers. 1961 104—106.

(29) P. Birot et J. Dresch: Op. cit. 464—465.

に定住地から家畜を低地に送る形式であり、現存するのは、イベリア半島<sup>(30)</sup>やコーカサス山地、アナトリア北西部<sup>(32)</sup>、バルカン半島ヘルツェゴヴィネ<sup>(33)</sup>などにみられるものであるが、本来、トランスヒュマンズにおいては、冬に定住地における舎飼をおこなうことも可能なのであるから、逆トランスヒュマンズが成立するための技術的条件は、山地の夏の牧場において農耕が可能で、したがってそこが定住地になるといふことであると考えることができる。

逆トランスヒュマンズにおいては、低地に位置する冬の牧場は、そこにおける定着農耕民によって所有されている場合が多く、その場合には移牧民は、借地または家畜の世話を低地の農耕民に委託する。また低地の冬の牧場を慣習法上入会地として所有していた場合にも、それが国家権力あるいは植民地当局によって *res nullius* とみなされて没収されてしまった事例も多い。このようにして、逆遊牧は、低地における農業の発展にともなって、その生活の基盤を失う機会が多いのであり、低地の牧場を失って、より高い山地に放牧地を求めるようになった事例は、エルブース南山麓<sup>(34)</sup>、アトラス山脈の各地<sup>(35)</sup>をはじ

めとして多く、定住地を離れて牧草地を求めて移動するようになる、いわば遊牧化 nomadisation という現象がひきおこされることもある<sup>(36)</sup>。

歴史的にみても、このようにして、逆トランスヒュマンスが消滅した例は多く、バルカン半島では、前世紀末から今世紀初頭にかけてのザドルーガの解体が、山地の移牧民の生活を破壊して、山地人口の急減を招来した<sup>(37)</sup>、イタリアでは、バダナ平原をはじめとする平野における農業の発展が、冬季の逆移牧を不可能にして、これが山地における集約的酪農業発展の契機になった。ヨーロッパでは、逆トランスヒュマンスのみでなく、トランスヒュマンスそのものが、この百年間、急激に衰退しつつあるが、なかでも、農業発展にもなつて冬の牧場の面積の減少が著しい<sup>(38)</sup>。

もともと、定住をその条件とするトランスヒュマンスは、農耕と密接に結びついた形態である。農耕に直接従事しないトランスヒュマンス集団は、現在、新大陸の企業的トランスヒュマンスを別にすれば、旧大陸ではアトラス山脈やサハラ砂漠中の山地にいくらかの例があるにすぎず、これらは、いずれも、砂漠地帯における完全遊

牧民とおなじく、低地の農耕民を経済的または政治的に支配することによって、非農耕移牧民たりえている<sup>(39)</sup>。その機構は、本質的には、ヨーロッパの、王権および教会勢力に保護されていたメスタ、あるいは、フィレンツェやモンペリエの特権商人と結びついていたトランスヒュマンスのものと同じものと考えることができよう。そうだとすれば、一八三七年のメスタに対する特権廃止以後、スペインのトランスヒュマンスが急速に衰退した<sup>(40)</sup>のと、まさに同一の状況が、その具体的内容は国によってかなりちがっているが、現在アラブ諸国で実現されつつある土地改革をはじめとする諸改革によって、このような形の、農耕民に対する支配に立脚していた非農耕移牧民にも生ずるであろう。クラークの報告するチュニジアアトラスのメラジグ族などは、このような例と考えることができるのである<sup>(41)</sup>。

しかし、一般的には、ヨーロッパとちがって、北アフリカ、西アジア、中央アジアにおいては、トランスヒュマンスに従事する牧畜民の数は、最近約十年間に増大してきていることが指摘されている<sup>(42)</sup>。これはひとつには遊牧民、半遊牧民の定住化が、これらの地域において、主

(39) 定 住 化

に冬の牧場における農耕の開始という形をとって進行する<sup>(43)</sup>ことによるものである。これが可能になるためには、土地所有や灌漑などの土地改良に関する諸問題が解決されなければならないのは勿論であるが、シリアなどでは、政策的にも、このような方向での定住化がすすめられている<sup>(44)</sup>。しかし、移牧民の増大は、もうひとつ、定住農耕民が、あらたにトランスヒュマンズを開始することによっても結果されるのであり、ドゥ・プラノールによって報告されているイランのアゼルバイジャン地方サーヘンド山麓の例などはこれであり、ドゥ・プラノールによれば、この地帯の移牧は比較的起源が新しく、その契機は、このような、低地の定着農耕村における人口増大によるものである<sup>(45)</sup>。このアゼルバイジャンの場合、新たに放牧が開始された土地は、国有の未耕地であるが、いずれにせよ定着農耕民によってトランスヒュマンズが開始されるためには、*Miri* や *Waqf* などその起源は一樣ではなくても、夏の放牧を可能にするような土地そのものと制度の存在がまず問題としてとりあげられなければならないであろう。

(30) 北東部のネ山地にもさうである。M. Wolkowich:

L'élevage dans le monde. Paris 1966 p. 122.

(31) A. N. Rakinikov: Op. cit.

(32) J. Frödin: Les formes de la vie pastorale en Turquie. Geografiska Annaler, 1944 にさう報告しているさうである。ここでは、末尾至行: オアシス農業と遊牧の間——西南アジアに関して文献紹介的に——「人文地理」第十三巻三号 一九六一年 二六四—二七六頁によった。

(33) H. Isnard: Notes sur la transhumance pastorale en Herzégovine. Méditerranée, 1961 37—56.

(34) X. de Planhol: Du piémont tchéranais à la Caspienne. Observations sur la géographie humaine de l'Iran septentrional. Bulletin de l'Association de Géographes Français. Nos. 284/285. 1959 57—64.

(35) J. Despois: L'Afrique du Nord. Paris. 239—241.

(36) このような事例が報告されているのは、主に北マソリックに關してである。(V. Monteil: Op. cit.) ただ、あと本文でふれるように、マソリックの遊牧化が、このような生活の基盤の破壊から生ずるのではなく、強制的に定住された遊牧民が遊牧の方が経済的に有利であるから(あるいはそのように考えて)、中央権力が弱体化したとき、再び遊牧生活に戻る場合もある。(M. Avard: Settlement of nomadic and semi-nomadic tribal groups in the Middle East. International Labour Review Vol. LXXIX. 1959 25—

56)°

- (75) H. Isnard: Op. cit.
- (76) P. Arbos: The geography of pastoral life, illustrated with European examples. Geographical Review. Vol. 13 1923 559—575.
- (77) M. Wolkowitsch: Op. cit. p. 121.  
V. Monteil: Op. cit. p. 579.
- (78) 上記の專書に P. Veyret: Op. cit. 178—185 に詳し。
- (79) J. I. Clarke: Studies of semi-nomadism in North Africa. Economic Geography. Vol. 35. 1959 95—108.
- (80) V. Monteil: Op. cit.
- (81) R. Capot-Rey: Le mouvement de la population dans les territoires du Sud. Revue Africaine 1940 Nos. 384/385 232—248.  
A. N. Rafinikov: Op. cit.
- (82) M. Awad: Op. cit.
- (83) X. de Planhol: La vie de montagne dans le Sahel (Azerbaïdjan iranien). Bulletin de l'Association de Géographes Français. Nos. 271/272 1958 7—16.

トランスヒュマンズの起源と定住化とが、直接結びつくかどうかということは、このようにして、現在旧大陸の乾燥、半乾燥地域において進行している過程において

も、二つの場合が見出されるのであるが、この問題は、文化史的に、定着農耕から遊牧にいたるまでの諸形態をどのように位置づけるかという問題とも関連する。トランスヒュマンズを、一般的に、すなわち地中海地域やアルプス、ピレネ、バルカンの山地をも含めて旧大陸の農牧混合文化圏全体において、より集約的な土地利用にもとづく定住性の強い生活様式への発展の一段階としてとらえる通常なされている解釈<sup>(45)</sup>に対して、他方、ヨーロッパの歴史においても、十一〜十二世紀の農村における人口の増大期に、アルプスにおける放牧が開始された<sup>(47)</sup>というような事実もあるのである。牧畜的生活諸様式の発展系列を、文化史の立場から考えているヴェルトの見解は、この後者の立場に立つものであって、彼は、冬の舎飼をともなうトランスヒュマンズをアルム経済 *Almwirtschaft*、そして、筆者がここで逆トランスヒュマンズと規定したものをトランスヒュマンズというように、彼独自の言葉の用い方をして、アルム経済から、トランスヒュマンズ、牧人経済 *Küher-Wirtschaft* をへて純粋遊牧 *Reines Hirten-Nomadentum* へという発展の図式をのべて、遊牧民文化は、犁農耕のアルム経済から発生したものであ

ることをのべている<sup>(46)</sup>。この文化史上の図式は、しかしながら、牧草や根菜類の栽培をとまなう、いわゆる農業革命をへた後の現在のヨーロッパにおける(あるいは、そのような農業技術を導入して他地域において成立した)集約的なアルプスにおける経営と、文化史上の一段階としての仮設であるアルム経済との混同の上に成立しているものであり、さらにまた、Küherが、はたして生活様式によって区別される社会集団をかたちづくる範疇であるかどうかという疑問も残って、トランスヒュマンズにおける農耕の意味を考察する上では、あまり意味をもたない。むしろ定住化、あるいは、その生態学的意味における遊牧化の、技術的プロセスと社会的条件を、具体的にみていく中で、位置づけられるトランスヒュマンズの性格をこそ問題にすべきであろう。

(46) たよまなう J. Blache: L'Homme et la montagne, Paris, 1933.

E. Otremba u. M. Kessler: Die Stellung der Viehwirtschaft im Agrarraum der Erde. Erdkundliches Wissen, Schriftreihe für Forschung und Praxis, Heft 10, Wiesbaden 1965.

(47) P. Dollinger: L'évolution des classes rurales en

Bavière jusqu'au milieu du XIII<sup>e</sup> siècle. Paris, 1949.  
 (48) E. Werth: Grabstock, Hacke und Pflug, Versuch einer Entstehungsgeschichte des Landbaues, Ludwigsburg, 1954, 104—127 (敷内芳彦、飯沼二郎訳、農耕文化の起源 一九六八年 一三九—一七五頁、この訳本では、Küherという言葉に「酪農民」という訳語があてられていぬ)

定住化という現象そのものは、以上みてきたように、遊牧または半遊牧生活の破壊、したがって、その種族的社会組織の解体そのものを通じてあらわれるのが一般的であるが、それは、何らかの意味でその集団がする土地利用の集約化ということを契機としても進行する。前者の場合、たとえ農耕を続けることになっても、それが、新しい開拓地やアルジェリアにおける戦略村<sup>(49)</sup>への強制乃至半強制的居住という形で、放牧地や一時的耕地の利用と結びついていたかつての社会組織をまったく欠いてなされる場合には、その「新しい村落」の社会的性格は極めて流動的な、その意味で、村落の成員個々の定着性を欠いたものになる。そこには、伝統的な農業技術の根強い残存とは対照的に、ヨーロッパやモンスーンアジアの農村をみなれた者には異様なまでの流動性がある<sup>(50)</sup>。こ

の場合、牧畜経済がかなりの比重を占めていても、共同牧人の制度が存在することも、あらたにそれが形成されることもない。また、灌漑耕地においては、ナツメヤシが植えられることも関連するが、この場合一般に耕地は閉鎖耕地である。

強制的または半強制的な定住ではないが、定住地が、*Wach*などの形で維持されてきた大土地所有制の中にくみこまれていた場合、旧来の遊牧民的な社会組織が弱体化するというように、多くの報告がふれているが、この場合には、さきに指摘したように、この地主制の性格そのものを吟味しないかぎり、一般的なことを云々することはできないであろう。ただ、大野の報告において、イランの農地改革後、遊牧民の末端の小集団の長としてのキヤドコダーを中心とする組織が、再び表面にあらわれるようになったという指摘は興味ぶかい。しかしこの場合には、開放耕地制で、マールキ地主体制のもとにおいても、割替耕作制が維持されていたという物質的基礎を無視することはできないであろう。

割替耕作制をはじめとする定着農業村の社会組織と、以前の遊牧社会の組織との関係について、ドゥ・プラノ

ールは、アナトリアにおいて定住化開始後経過した期間がさまざまないくつかの村落を比較検討して、定住の開始は、二十〜三十家族の、比較的小規模な集団によってなされ、居住形態も、むしろ散居に近く、一世代乃至二世代たつてくるにつれて大集村と、それにとりまなう割替耕作制さらには耕区制さえもが形成されてくることを指摘している。このような村落的社会結合がうまれる契機として、この場合、牧畜における共同牧人の発生と、村落の規模の拡大ということがあげられているのであるが、これらの状況は、かなりがアナトリアのステップの自然条件、古くからの定着農民の遊牧民に対する政治的力の優越が他の地域より著しかったことなどの特殊な地域的条件によるものと考えられる。また、割替耕作制は、多くの新しい定住地においてもみられるのであるが、このような割替制や耕区制に規制されているところの、西欧的な意味では自作農と称することのできない自作農を、土地改革をすすめてきた中央権力が、法的にどのような取り扱いかという点でも、それを認めるイランなどと、そのようなことを認めないマグレブ諸国とは、その後における農業集落発展にとっての条件が非常にちがって

いるということができよう。

農耕部門の拡大が、遊牧および半遊牧集団の定住化をうながす契機をなすのは、さきにみた通りである。しかし、牧畜部門の拡大によって定住化がなされるといふことも、理論的には考えられることであり、急速に定住化した遊牧民の社会的適応が困難で、病氣、道德的頹廢などの問題が生じてきている現実から、むしろ、牧畜経済を主体にした方向で定住化政策を進めるべきであり、土地改良のための社会投資などを考慮にいれば、その方が経済的であるという主張<sup>(53)</sup>もなされている。問題は、そのような方向での定住化を阻害している要因は何であるかということであろう。

以上、いくつかの問題点についてみてきたように定住化というものの社会的側面を考えようとするれば、当然、そこでは、地域的、体制的多様性というものが、その条件として、考察の対象になるのであるが、そのような考察をすすめるために、比較検討すべきデータそのもの、

実証的な事例の報告が、あまりにすくなくのが現状なのである。

(49) これに「X. de Planhol: Nouveaux villages algérois, Atlas Bliéen, Chenoua, Mitidja Occidentale. Publications de la Faculté des Lettres et Sciences Humaines d'Algers. XXXIX. Paris. 1961」について事例報告がある。

(50) エン・フマン・ノットもこのことを指摘している。参照' M. Awad: The assimilation of nomads in Egypt. Geographical Review. Vol 44. 1954 240—252. E. Wirth: Der heutige Irak als Beispiel orientalischen Wirtschaftsgesistes. Die Erde Bd. VII. 1956 30—50 などこの種の指摘は多い。

(51) 大野盛雄：前掲論文。

(52) X. de Planhol: De la Plaine pamphylienne. Op. cit. 240—252 284—311.

(53) V. Montell: Op. cit. 44-45 R. Capot-Rey: Le Sahara français. Paris. 1953 p. 364.

(一橋大学助教授)